

私のまちにも「ふるさと」が



宗頭

山本家跡

山本家は宗頭バスの停留所の北方約一〇〇メートル大迫川に添う山懐にあって、酒場、帳場、本宅、倉庫等の豪壮な建築が建ち並び、それに広大な庭園及び馬場があり四〇〇年続いた豪農の館として、面目躍如たるものがあつた。

終戦当時は本町水田の一三%を所有し、小作米の収納は毎年三〇〇〇俵(六〇キロ入)に垂んとする勢であつた。

往時は金融制度が未発達で、庶民に必要な金策に一苦勞であつたが、多額の貯蓄を有する山本家は低利で融資し感謝されていた。仁徳は跳返り金利の収益も侮り難きものであつた。

常時二〇人近い雇傭人あり、財産管理清掃等分担し、聊かの粗相なきよう萬全の策を講じていた。

毎年正月一日には役場職員全員二日には全小作人が招待され、当日は一切無礼講主人の感謝と懐いの情溢れる中、飲み放題食い放題の歓待される待望の行事であつた。長者が三代続かないとは甚間の諺であるが、山本家は延々何故四

〇〇年続いたか、興味津津検索して処世の論としたきものである。緋けは藩主毛利家に対しては代々誠実で忠勤を励み、献納米銀は財力の向上と共に逐年増加し到底列挙するに遑がない程である。

藩主の信頼も深く湯本俵山に御入湯のためお下りのとき、又用務で三隅通過の節は必ず本陣を仰せ付けられ御休憩があつたとも伝えられている。

代々大庄屋格に任せられ遂には名字帯刀を許され、続いて武士に取立て藩主直臣に加えられたことに依つても藩主の思召しの一方ならなかつたこと察知する事が出来る。

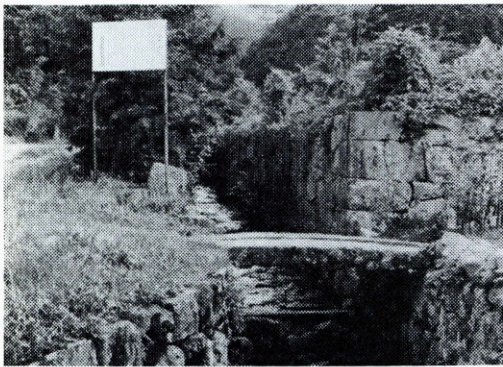
村内に困窮者があれば救恤を惜しまず、又公共の爲に財を供したことも限りが無い。二三を挙げれば、明治初期に宗頭小学校を建築して村に寄贈、昭和四年太郎氏他界に臨んでの教育費の寄付、村田清風の尊聖堂創設に資を供したる等到底記し尽せない。

要するに山本家は豊かなれども守銭奴にあらず、上を敬い下を愛し、仁徳豊かな人柄の人材が続いて輩出したことが永年続いた因と見て間違いないであらう。然るに大東亜戦争の敗北

は豪農の崩壊を、山本家を例外とするには許さなかつた。農地改革の浪火一発全農地は解放され、インフレは莫大な貯蓄を皆無にしきものとした。今は宏壮であつた大邸宅も壊され夏草がぼうぼうと伸び忠則氏老末亡人が蓬屋に一人繁栄の昔の夢をなつかしみながら静かな余生を過して居られる。

先祖山本小殿は源氏の落武者蒲の冠者源範頼の重臣という、佐々木某の世話で宗頭に落ちつき刀を棄て百姓になつた。当主は尼崎市で医院を開業されている。

文化財専門委員 田村憲治



▲ 宅地内を流れる大迫川は河床も石畳で昔がしのばれる



俳句

清風句会

八月例会

(順不同)

山中 重女

明けの空心澄む日の鉄線花

鉄線花精華の憩竹の垣

亡き妻の植えし鉄線白ばかり

ヘルメット脱げば美少女夏木立

杉木立行く細道や妻わら帽

幼帝のいます地はるか夏木立

岡 松月

思い走す姑の遺愛の鉄線花

志士の墓拜す立秋あと三日

夏木蔭地蔵も新のよだれかけ

鉄線花たゞつむ人の白い杖

上田 雪子

鉄線花はめて仲人話し出す

野地蔵様拝み宿借る夏木蔭

松野喜子雄

そよ風や光幾すじ夏木立

窓ごしに覗き込むよな鉄線花

齊藤 元

幾年を耐え越し宿る鉄線花

山峡の水澄めりけり夏木立

池田 久子

吾窓に迷い来て鳴く蝉二つ

雨ぐせのつきし夕べや夏木立

山野たけ子
声はりて一樹かしまし油蟬
青葉蔭日脚遊ばせ苑の友
仁保 民子

岩本さつき
夕日映ゆ寝ぐらの小鳥夏木立
鉄線花眺める老も手をのぼし

武家の墓幹越し海見ゆ夏木立
鉄線花咲く度び想う吾娘のこと
大深 八重

宮垣 萬子
渴水の川驚渉る合敷の花
鉄線花帰咲きして朝詣

竹内 奈美
掌にうけし岩這う水や夏山路
まなうらの孫の笑顔や蝉の声

因藤 兎史
夜のしじま縫うて城なす鉄線花
夏深く山寺の軒の雨雫

選者 追吟
千年の楠の夏木や句碑除幕
どこやらに小滝あるらし夏木立

永田 石山
図書館の朱き煉瓦や夏木立
炎昼の風の吹き抜く磯に住み



短歌

三隅短歌会

八月作品

きらぎらとたぎる日ざしも、の
かわとそてつの若葉日々伸び
ゆく